

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16922

研究課題名(和文)13-15世紀ペルシア語文化圏における文芸活動の隆盛と宮廷文化

研究課題名(英文)Persian Literary Activity and Court Culture of Persianate Societies in 13th-15th Centuries

研究代表者

大塚 修 (OTSUKA, Osamu)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：00733007

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、世界9ヶ国15都市の図書館・博物館・研究機関で写本調査を行い、イルハーン朝時代(1256-1357)からティムール朝時代(1370-1507)にかけてペルシア語文化圏で編纂された文献の情報を、その分野を問わず網羅的に収集した。その上で、それぞれ文献の献呈対象者や編纂の背景を分析することにより、この時代の学術活動の実態と宮廷文化の様相を、地方政権の事例も含めて、明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの研究では、イルハーン朝がペルシア語文芸活動の興隆に果たした役割が重ねて強調されてきたものの、その典拠とされる作品は、「有名な」一部の歴史書や文学作品に限定されており、その評価は一面的なものにすぎなかった。これに対し、学界に紹介されていない作品も含む全ての分野の文献を考察の対象とすることで、地方政権の宮廷文化の様相をも明らかにした本研究は、新たな視点だけではなく、新たな文献史料を提示するという意味でも、ペルシア語文化圏史研究に大きく寄与するものと言えるだろう。

研究成果の概要(英文)：I visited libraries, museums and research institutes in fifteen cities of nine countries and researched manuscripts of all kinds of Persian works copied in 13th -15th centuries. In this study, I explain a big picture of Persian literary activity and court culture of Persianate Societies, which cover even small dynasties.

研究分野：アジア史・アフリカ史

キーワード：ペルシア語文化圏 イルハーン朝 ティムール朝 宮廷文化 文芸活動 写本 『オルジェイト史』
イスカンダル・スルターン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、歴史学の分野を中心に注目されている概念の一つに、「ペルシア語文化圏」という概念がある。ペルシア語は現在ではイラン、アフガニスタン、タジキスタンで使用される、話者人口の少ない言語にすぎないが、前近代のユーラシア大陸において広く使われた共通語であった。これまでは、ペルシア語圏の歴史というものは、現代の国民国家イランの歴史の一部として説明されることが多かったが、この概念は、このような国民国家の存在を前提とする歴史叙述を脱構築し、ペルシア語が通用していた特定の地域・時代を一体のものとしてとらえようとする新しい試みである。国内では、森本一夫編著『ペルシア語が結んだ世界』(北海道大学出版会、2009年)や近藤信彰編『ペルシア語文化圏史研究の最前線』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2011年)など共同研究の成果が出版され、国外でも、ペルシア語文化圏学会(ASPS)が設立されるなど、同様の概念は広く定着しつつある。

このペルシア語文化圏史研究において、画期の一つと評価されてきた時代が、モンゴル帝国がユーラシア大陸に君臨した13-14世紀、そして、その後継諸国家の時代である。ペルシア語はモンゴル帝国の東西をまたぐ共通語としての役割を果たすようになり、また、モンゴルの征服による人の移動のために、それが使用される地域は急速に広がった。このようなペルシア語文化圏の拡大に特に大きな役割を果たしたとされるのが、モンゴル系のイルハーン朝(1256-1357)がイラン高原を中心とする地域を支配した時代である。イルハーン朝ではペルシア語による文芸活動が庇護・奨励され、数多くのペルシア語文献が編纂された。有名なラシード・アッディーン(1318没)のペルシア語普遍史書『集史』も、しばしばこの文脈の中で取り上げられてきた。

研究代表者は、本研究開始時に至るまで普遍史書(神による天地創造に始まる人類史)という文献ジャンルに焦点を当てた研究を進めてきていた。そしてその過程で、上述のイルハーン朝時代には、中央の政権だけではなく、イルハーン朝に服属した地方政権においてもペルシア語文芸活動が積極的に庇護・奨励されていたという事実、そして、これまで紹介されてきた『集史』など「有名な」作品以外にも重要な文献が残されている事実が明らかになってきていた。この地方政権に対する視点の欠如、および網羅的な文献調査の欠如(特に歴史書以外の作品について)という点を強く意識するようになり、本研究に着手するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、イルハーン朝期からティムール朝期(1370-1507)にかけてペルシア語文化圏において編纂された文献を、その分野を問わず網羅的に収集すること、そして、各文献の献呈対象者と編纂の背景を分析することにより、この時代の学術活動の実態と宮廷文化の様相を明らかにすることである。既存の研究では、イルハーン朝がペルシア語文芸活動の隆盛に果たした役割が重ねて強調されてきたが、その際に典拠とされる作品は、「有名な」一部の歴史書や文学作品に限定され、その評価は一面的なものにすぎなかった。これに対し本研究では、学界に紹介されていない作品も含めて全ての文献を考察の対象とすることで、中央の政権に加えて地方政権の宮廷文化の様相をも明らかにし、今後のペルシア語文化圏史研究に新たな視点を提示する。

3. 研究の方法

本研究では、13-15世紀にかけてペルシア語文化圏で編纂された文献を網羅的に収集するための写本調査、および、データベースの作成とその分析、という二つの作業を中心に行う。4年間の写本調査は、未刊行のアラビア文字文献の写本を数多く所蔵するイランとトルコの図書館を軸に、インド、アゼルバイジャンなどでも実施する。分析の過程で特に重要な文献であると

判断したものについては、史料解題と校訂テキストの出版し、広く学界に紹介する。国際学会で研究報告を積極的に行い、その成果を著名国際誌に投稿するなど、国内だけではなく国外の専門家に対する研究成果の発信も積極的に行う。

4．研究成果

(1) 以下の世界9ヶ国15都市の図書館・博物館・研究機関において、およそ13-15世紀に作成された写本のデータを網羅的に収集し、整理した。そのうえで、分析が必要になる写本については、適宜その画像データを購入した。

ニューデリー(インド)

ヌール・マイクロフィルムセンター

ランプル(インド)

ラザー図書館

コルカタ(インド)

アジア協会附属図書館

ハイデラーバード(インド)

サーラル・ジャング博物館附属図書館、テランガーナ州政府東洋写本図書館・研究所、

テランガーナ州文書館・研究所

ベルリン(ドイツ)

ベルリン州立図書館

テヘラン(イラン)

テヘラン大学附属中央図書館、議会図書館、マレク図書館、ゴレスターン宮殿附属図書館、

アブドゥルアズィーム廟附属図書館

シーラーズ(イラン)

国立図書館ファールス州支部、エマーム・アスル学院

マシュハド(イラン)

レザー廟附属図書館

イスタンブル(トルコ)

スレイマニエ図書館、トプカプ宮殿附属図書館

バクー(アゼルバイジャン)

写本研究所

トビリシ(ジョージア)

ジョージア国立写本センター

エジンバラ(イギリス)

エジンバラ大学附属図書館

ロンドン(イギリス)

英国図書館、王立アジア協会

ライデン(オランダ)

ライデン大学附属図書館

リスボン(ポルトガル)

グルベンキアン博物館

この中で、インド、アゼルバイジャン、ジョージアの機関に所蔵されるアラビア文字写本の調査は、これまで積極的に行われてきてはならず、短期間の調査ではあったものの、学界に紹介さ

れていない新しい情報を多く得ることができた。特筆すべきは、イルハーン朝で活躍した歴史家カーシャーニー（1323/4以降没）が著したペルシア語普遍史書『歴史精髓』の写本2点を、テランガーナ州文書館・研究所（ハイデラーバード）で発見し、その画像データの入手に成功したことである。これらの写本には、これまで確認されていなかった部分のテキストが含まれており、これにより、『歴史精髓』の失われていたテキストの一部が明らかになった。この事例からも分かるように、所蔵する写本の目録すら刊行されていない機関もいまだ多いインドにおける写本調査は、今後のペルシア語文化圏史研究にとっては必要不可欠な作業だと言える。また、グルベンキアン博物館（リスボン）に所蔵される、ティムール朝の王子イスカンダルに献呈された『選集』写本の調査が許可されたことも大きな成果であった。歴史書だけではなく、文学書や科学書も含まれるこの写本は、まさに、この王子の好みを反映したものであり、この時代の学術活動の実態と宮廷文化の様相を明らかにする重要な手がかりとなる。

（2）本研究課題の遂行期間内で公表された研究成果については、「5.主な発表論文等」に記してあるが、特筆すべき成果としては、日本語単著1点の刊行、および、著名国際誌に掲載された2点の論文をあげることができる。

2017年に刊行された『普遍史の変貌：ペルシア語文化圏における形成と展開』（名古屋大学出版会）は、研究代表者のこれまでの研究成果をまとめたもので、15世紀までのペルシア語文化圏における普遍史叙述の発展について論じた専門書である。本書では、普遍史書という文献ジャンルに関連したものだけではあるが、当時の学術活動の実態と宮廷文化の様相の一部を明らかにすることに成功した。

2018年に刊行された“Qāshānī, the First World Historian: Research on His Uninvestigated Persian General History, *Zubdat al-Tawārīkh*,” *Studia Iranica*, 47-1, pp. 119-149 では、上述のテランガーナ州文書館・研究所（ハイデラーバード）で発見した写本の情報も盛り込みながら、研究史上注目されてこなかった、カーシャーニー著『歴史精髓』の価値を明らかにした。これにより、「史上初の世界史」と高く評価されてきたラシード・アッディーン著『集史』は、『歴史精髓』に全面的に依拠した作品であることが明らかになった。さらに、カーシャーニーという歴史家の役割を明らかにできたことで、イルハーン朝時代の学術活動の実態を、より具体的に説明することが可能になった。

2019年に刊行された“The Hazaraspid Dynasty’s Legendary Kayanid Ancestry: the Flowering of Persian Literature under the Patronage of Local Rulers in the Late Il-khanid Period,” *Journal of Persianate Studies*, 12, pp. 181-205 では、研究史上注目されてこなかった、ハザーラスプ朝宮廷における文芸活動に注目し、文学作品をも含む、イルハーン朝時代の地方政権における学術活動の一端を明らかにした。

（3）ティムール朝時代に編纂されたと考えられる『集史続編』の校訂作業を進めた。これまで学界に知られていなかった写本をも参照した校訂作業はほぼ終了しており、今後、英語序文を付した上で公表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 亀谷学、大塚修、松本隆志 | 4. 巻 8 |
| 2. 論文標題 イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注(1) | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 人文社会科学論叢 | 6. 最初と最後の頁 123-154 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |
| 1. 著者名 OTSUKA Osamu | 4. 巻 12-2 |
| 2. 論文標題 The Hazaraspid Dynasty 's Legendary Kayanid Ancestry: the Flowering of Persian Literature under the Patronage of Local Rulers in the Late Il-khanid Period | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Persianate Studies | 6. 最初と最後の頁 181-205 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1163/18747167-12341334 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 大塚修 | 4. 巻 102-4 |
| 2. 論文標題 宮紀子著『モンゴル時代の「知」の東西』 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 史林 | 6. 最初と最後の頁 98-105 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.14989/shirin_102_658 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |
| 1. 著者名 大塚修 | 4. 巻 新輯48 |
| 2. 論文標題 人類の起源を求めて：前近代ムスリム知識人による諸民族の系譜の創造 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 西洋史研究 | 6. 最初と最後の頁 166-183 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 OTSUKA Osamu | 4. 巻 47-1 |
| 2. 論文標題 Qashani, the First World Historian: Research on His Uninvestigated Persian General History, Zubdat al-Tawarikh | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Studia Iranica | 6. 最初と最後の頁 119-149 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2143/SI.47.1.3285721 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 大塚修 | 4. 巻 126-5 |
| 2. 論文標題 2016年の歴史学界 回顧と展望 : 西アジア・北アフリカ (イスラーム時代) | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 史学雑誌 | 6. 最初と最後の頁 284-289 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 大塚修 | 4. 巻 75-2 |
| 2. 論文標題 『集史』の伝承と受容の歴史 : モンゴル史から世界史へ | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 東洋史研究 | 6. 最初と最後の頁 347-312 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.14989/244670 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 6件)

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 大塚修 |
| 2. 発表標題 ペルシア語文化圏における普遍史の変貌と簿記術 |
| 3. 学会等名 2019年度九州史学会大会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 OTSUKA Osamu |
| 2. 発表標題 The Transmission and Reception of the Jami al-Tawarikh |
| 3. 学会等名 International Workshop "The Fate of Rashid al-Din's Manuscripts (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 大塚修 |
| 2. 発表標題 ティムール朝歴史編纂事業再考：『ジャアファリーの歴史』を中心に |
| 3. 学会等名 日本オリエント学会第61回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 OTSUKA Osamu |
| 2. 発表標題 Review on Part IV The Later Middle Period (ca. 1258-1453) |
| 3. 学会等名 The Book Launch of the Wiley Blackwell History of Islam (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 OTSUKA Osamu |
| 2. 発表標題 The Flowering of Persian Literature under the Patronage of the Hazaraspid Dynasty: How did Local Rulers Legitimate Their Rule in the Late Ilkhanid Period? |
| 3. 学会等名 International Conference "Kingship, Ideology, Discourse: Legitimacy of Islamicate Dynasties" (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 大塚修 |
| 2. 発表標題 人類の起源を求めて：前近代ムスリム知識人による諸民族の系譜の創造 |
| 3. 学会等名 2018年度西洋史研究会大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 大塚修 |
| 2. 発表標題 普遍史書としての『パナーカティール史』：『集史』の呪縛から離れて |
| 3. 学会等名 日本オリエント学会第60回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 大塚修 |
| 2. 発表標題 ペルシア語普遍史の伝承と受容の歴史：『集史』中心主義を超えて |
| 3. 学会等名 白山史学会第55回大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 大塚修 |
| 2. 発表標題 歴史家カーシャーニーの付度：二人の名宰相ラシード・アッディーンとアリーシャーの狭間で |
| 3. 学会等名 2017年度内陸アジア史学会大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 OTSUKA Osamu |
| 2. 発表標題 Hand-Allah Mustawfi and Iran-zamin: With a Special Reference to the Unexamined Source, the Dhayl-i Zafar-nama |
| 3. 学会等名 Workshop "From the Mongols to the post-Safavids: Iranian Historical Studies in Japan" (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 OTSUKA Osamu |
| 2. 発表標題 Kingship and Titles of Ilkhanid Rulers: Did They Really Proclaim Themselves Padshah-i Iran? |
| 3. 学会等名 The Eighth Biennial Convention of the Association for the Study of Persianate Societies (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 OTSUKA Osamu |
| 2. 発表標題 Qashani and Rashid al-Din: A New Perspective on Ilkhanid Historiography |
| 3. 学会等名 Workshop "Dynamics in Middle Eastern Societies during the Mongol Period" (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計5件

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 千葉敏行 (編) | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 山川出版社 | 5. 総ページ数 304 (28-79) |
| 3. 書名 1187年：巨大信仰圏の出現 (共著大塚修、第1章「セルジューク朝の覇権とイスラーム信仰圏の分岐」) | |

| | |
|--|------------------------|
| 1. 著者名 南塚信吾 (編) | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 322 (9-28) |
| 3. 書名 情報がつなく世界史 (共著大塚修、第1章「写本が伝える世界認識」) | |

| | |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 大塚 修 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 名古屋大学出版会 | 5. 総ページ数 444 |
| 3. 書名 普遍史の変貌：ペルシア語文化圏における形成と展開 | |

| | |
|--|---------------------------|
| 1. 著者名 Eva Orthmann & Petra G. Schmidl (eds.) | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 EB-Verlag | 5. 総ページ数 295 (173-187) |
| 3. 書名 Science in the City of Fortune: The Dustur al-Munajjimin and Its World (共著 OTSUKA Osamu, "The Dustur al-Munajjimin as a Source of Early Ismaili History") | |

| | |
|---|-----------------------------------|
| 1. 著者名 池田嘉郎、上野慎也、村上衛、森本一夫 (編) | 4. 発行年 2016年 |
| 2. 出版社 山川出版社 | 5. 総ページ数 368 (138-140、144-146) |
| 3. 書名 名著で読む世界史120 (共著大塚修、第45章「シャー・ナーメ」、第47章「トルコ語辞典」) | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap
<https://researchmap.jp/036>

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|